＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊

# ギター・レッスンと英語習得

石　黒　敏　明

過去何度も挫折したギターの手習いを還暦後再度始めてみた。その間気づいたギターレッスンと英語習得過程に関する類似点をまとめ、さらに二つの習得に共通する重要な要因を考えてみた。

ギター習得と言語習得との一番の類似点は、音楽演奏や英語を「よく聴く」ところから始まる点である。英語教育部門では、初期の段階では「話させる」ことを意識的に遅らせ、「聴かせる」ことに重点を置く理論もあるくらいである。ギターレッスンでも、CDに収録されている演奏を聴くことから始まると思うが、実際の音楽教室でのレッスンは、音出しから始まる。レッスンでは、いきなり左手でコードを学び、左手でピックを使いリズムを取りながら、「アウトプット」の練習に徹する。しかし、教師の「曲を知れば、合わせやすくなる」というコメントからも、レッスン以外に練習曲を「インプット」する必要性を説いているに思える。しかし、音楽教室では時間的制約からか「インプット」練習は自宅での自学自習にまかせているようだ。

第2の共通点は、個々のコード習得が英語の個々の音/v/とか/f/の調音習得に似ていること。すなわち6弦のいくつかを左指で押さえながら、右手のピックで弾くことが、まるで上歯を下唇に触れさせながら子音を調音する方法に似ていると考えた。しかし押さえる指と弦の位置を正確に頭で理解しても、いわゆる「きれいな音」は出ない。なぜなら、ある指の腹が隣の弦に無意識に触れているためである。子音の調音方法を頭で理解しても「きれいな音」を調音できない体験と類似している。また、一つのコードから別のコードに移動する際、指を瞬時に移動しなければならず、正確に押さえきれないことがしばしばある。英語の“in the vase”を発音する際に、“the”から“vase”に瞬時に移動できない現象によく似ている。

第3の共通点は、順序よく配列されている教材

である。初期のレッスンでは、初めに左指を使ったG、Ｅｍ，Ｃの３つのコードを学び、次にその組み合わせとしてＧ－Ｅｍ－Ｃ－Ｇの連続を、右手に持ったピックを使いながら、ある一定のリズムで練習する。その後、すぐにそれらのコードを含む曲をCDに合わせながら演奏する。短い言語の単位を学び、それらの連続したフレーズや文、さらに段落を音読させられる学習過程に似ている。これが可能になるのは、教材の配列が十分考慮されているからであろう。すなわち学んだ数個のコードとそれらのコードの連続をマスターすれば、ある曲に挑戦できるように教材が配列されている。フォークソングが全盛期だった学生時代に購入したギター入門書とは、雲泥の差である。当時の教材は、メジャー・コード６個、マイナー・コード８個、セブンス・コード７個が初めに紹介され、その後に約30曲の楽譜がコード付で載っている。数個のコードの指の位置などは自学自習できても、教本に載っている１曲も弾けないまま挫折してしまった過去がある。一つ一つの練習が次の練習につながるという教材の配列の重要性は、英語教育の教材配列にも通じるものがある。

第４の共通点は、「螺旋状的」練習方法である。完璧なコードや言語音をマスターできなくても、さらに高度なレッスンに進む。しかし、そこにはマスターし切れてないコードや言語音を、新しいコードや音と共に螺旋状的に何度も復習する方法を採用している。音楽教室でのギターレッスンを振り返ると、個々のコードをマスターできず、未だ「きれいな音」が出せないにもかかわらず、どんどんカリキュラムは進み、曲までやらせるのは、少々無理があるのではと考えた。その時、ふと学生時代における/ｒ/と/ｌ/の 練習を思いだした。当時これらの子音を一晩中懸命に練習したが、完全にマスターしたとは言えなかった。しかし、次の子音や母音の練習へどんどん進んだ。幸い新しい教材は、前に習った未修得のコードや言語音をも含むので、何度も螺旋状に復習することになっていた。さらに、自宅での自主練習で気づいたことは、コードをきれいに出せなくとも、次のコードの練習に移らなければ、永遠にＧコードの指練習に終始してしまう恐れがあるということ。それでは、結果的に飽きてギター練習の中断につながると思った。すなわち、一つのコードさえできないという絶望が、過去40年間に幾度もギター練習を中断させた原因だったことに気づいたのである。

今回ギターのグループレッスンを通して学んだことと言語習得論の一端を関連させると次のようになる。現在の自分のレベル、すなわちＧコードだけでも完璧にできない技量なのに、それを含むコードの連続音を要求されることは、確かに大変なことである。しかし、自分がさらに上に伸びるのには、「限界と思う時に、より複雑な練習をもう一押し強要すること」が、技量習得の必要条件であると気づいた。言語習得分野で扱われているKrashenの「入力仮説」すなわち「ｉ＋１」と呼ばれるインプットの必要性、言い換えると、自分のレベルより一つ上の理解可能なインプットを受け続けることは言語習得の上で必要であること、またSwainの「出力仮説」、すなわち、不正確な表現をした学習者に対して、より正確な表現を強要、プッシュする必要性を説く仮説、さらにVykotzkyの「ZPD」は、自分より上の能力を持つ人との共同作業により自分だけでは達成できないレベルの課題が達成できるという理論に通じるものがある。

一つのコードも「きれい」に出せないのに、どんどん次のコード練習に進み、さらに曲までやらせる教師の練習生への期待度の高さに、「ちょっと待ってくれ、私は初心者だ！」と叫ぶ自分がいた気がする。しかし、言語習得理論の一端から判

断しても、さらに次の段階へ進む上で、学習者の到達目標を高く掲げ、到達達成への教師の期待度を高く維持することで、練習生の次なる技量レベルにつながるのだという考えに変わっていった。結論として、完璧主義にこだわるより不完全でも継続的に「限界を突き破る練習」に従事する姿勢、かつ到達目標を高く維持する「教師の期待度」こそが、ギターならびに語学の習得に重要な要因と考えるに至った。

＊・＊・＊・